

## 典拠と批評

——「蛇性の淫」と中上健次——

嶋田彩司

周知のように、「雨月物語」は文学史上の分類では読本というジャンルに属している。この読本が、主として中国の白話小説を典拠とすることを方法論上の特質とし、その具体的作業に「翻案」ということばがあたえられていることもよく知られているとおりである。「すべてのテクストは、ほかのテクストの吸収・変形である」（クリステヴァ）という指摘をまつまでもなく、引用や参照は読本作家の確信的な剽窃行為であると同時に、あらたなコンテクストを生産する創造行為でもあった。ゆえに研究者たちはまず典拠作品の発見をめざし、つぎにふたつのテクストを比較し、そこに作者個人の資質やその生きた時代の特性がもたらした「意味」をもとめてきた。これは読本研究のもっともオーソドックスなありかたであって、「雨月物語」研究もまたその例に漏れない。

「蛇性の淫」をとりあげてみようと思う。この作品の主たる典拠は、「舊世通言」中の「白娘子水鎮雷峰塔」（以下、「白娘子」）である。小稿に許された紙幅がじゅうぶんではないので、両者の梗

概を提示するゆとりはないが、秋成はこの典拠をほぼ忠実になぞって「蛇性の淫」を書いている。近年の「蛇性の淫」に関する研究は、この典拠との比較をおしての主題論がその中心を占めてきた。もちろん、「蛇性の淫」はこのほかにいわゆる道成寺説話をふまえているし、そこに国学者秋成の知見が色濃く反映されてもいるが、ともあれ「白娘子」との比較からしか「蛇性の淫」論ははじまらないといつてよい。

「蛇性の淫」にあつて「白娘子」には書かれていないこと、あるいは「白娘子」にあつて「蛇性の淫」に引きうつされなかったこと。論者がそこに目をつけるのは当然であろう。いうまでもなくそれは本作の主題に直結する。

たとえば結末近く、蛇の化身である真女子まなごが富子にのりうつり、豊雄に關係の継続をもとめて「君が御身まなごのみにあらし、此郷の人をもすべて苦しきめ見せなん」と恫喝するときに、豊雄が「此富子が命ひとつたすけよかし。然我そをいづくにも連ゆけ」と自己犠牲をもちとわぬ毅然たる態度を示すくだりは、「白娘子」

にはない秋成の創作である。ここをもつて「蛇性の淫」の主題は、ふつう次のように解釈される。つまり、この物語は社会的に未成熟な「穢物」であつた豊雄が、真女子（蛇）との邂逅を経て人間的な成長を遂げ、「丈夫心」を獲得するにいたるところにある<sup>(2)</sup>。と。たしかに物語の前半で真女子に翻弄され、呪縛されつづけた豊雄は、後半にいたつて真女子を圧する意志と力をもちはじめたかのであるし、法海和尚の助力を得てとはいへ、さいごには真女子を調伏してしまふ。わたしもまた本話を、異類に対する勝利をとおして、一人の青年の成長を描いたものとして読むことに賛意を表したいと思う。白蛇は豊雄にとつてのインシエーションともいふべき「意味」を付加されて、あらたなコンテクストのなかに再生されたのである。

しかし同時に、この成長という主題には、若干の留保ないし注釈が必要であるかとも思う。というのも、ここでいう成長の内実・実態を、もうすこしふみこんで考えてみるなら、それはかならずしも手ばなしで言祝ぎ得るものともいえないように書かれているようなのである。さきほど結末ちかくのくだりを引用する際に、わたしは真女子が豊雄を恫喝したと書いたが、じつはこれは正確ではない。この部分は「富子、豊雄にむかひて」ではじまり、恫喝のことはと豊雄の決意のことばがつづくのであつて、すなおに読むかぎり、「苦しきめ見せん」ということは富子のそれとして書かれている。もちろん、この富子は真女子のりうつた富子であるから、発せられた語が真女子の恫喝であることはたしかであり、それを前提として「此富子が命ひとつたすけよ

かし」と豊雄も言うのであるが、このとき彼が護ろうとしたものと闘おうとしたものが合体し、不可分となることによつて、豊雄の勝利・成長には微妙な陰翳が付与されることになるのもまたしかである。

端的にいえば、豊雄は富子を助けようとして富子自身を攻撃し、富子を喪失する。袈裟をかぶせられて「あな苦し、憫何とてかく情なきぞ」と苦悶し、哀訴するのは、真女子であつて同時に富子でもあつた。豊雄は法海和尚の教えにしたがつてこれを無視し、力を加えつづける。そしてその結果、真女子は白蛇の正体を顕し、調伏されて鉄鉢に封じこめられてしまふが、富子もまた「病にそみてむなしくなりぬ」とあるように、死んでしまふのである。それが豊雄の勝利・成長の内実・実態であつた。「白娘子」との関係でいえば、富子の設定自体が秋成の独創であつたが、秋成は豊雄の勝利を典拠に倣つて書きながら、そこにいくばくかの喪失を書き加えてもいる。論者がこの喪失をどれほどの重さをもつものとみるかによつて、豊雄の成長という主題におおきなニュアンスの差異がうまれてくるし、近世という時代における、男の女に対する抑圧的な力の行使を読みとらうとする解釈もそこに根拠をもつことになる。

ところが、このような「蛇性の淫」論のありかたそのものに異議をとなえ、これを無化しようとするような言説をつきつけた人物がいる。「蛇性の淫」の舞台、紀州新宮の地で生まれ、その肉体と精神を育んだ路地、喪われた故郷を物語をとおして経巡りつ

づけた作家、中上健次である。

秋成と中上健次の関係については、四方田大彦氏が簡明に、しかし重要な指摘をおこなっており、さらにそれをふまえて高田衛氏によってよりまとまった論考がなされている。小稿は両氏の説かれるところを参照し、それに依拠しつつわたしの考えるところを述べるものであるが、これも紙幅の都合で所論の詳細を紹介することができない。部分的な引用は本意ではないが、ご了解いただきたい。

ではまず、「物語の系譜 上田秋成」なる評論文をとりあげてみたい。

中上健次はここで「国文学者」の秋成論について、次のような過激なことを冒頭に書いている。

秋成も論じ難い。たとえ論じたとしてもその論は、この国の近代にはびこる人間中心主義、「文学」主義に毒され、秋成という物語や秋成が残した作品がさし示す物語を提示する事なく、重箱の隅をほじくる論に終始する。

彼はまた奇怪にも秋成を「中国人」という。そしてその真意は「漢字や漢字から派生した平仮名やカタカナを使って文章を書き、その文章で思考する人間という意味である」と説明する。文中には「法・制度」ということばがなんどもでてくるが、「中国で発明された」ことばを使い表現するかぎりにおいて、それは中国という「法・制度」の磁場に閉じこめられた「中国人」なのであるという。だとすれば、秋成のみならず日本語をもって表現行為をおこなうほとんどすべての日本人が「中国人」だということ

になってしまふわけだが、中上健次にとつての秋成が際だっているのは、秋成自らが「中国人」であることの自覚に曝され、苛立ち、抵抗を試みていることだという。

秋成においては物語を描く事が、無意識無自覚に法や制度に身をゆだね法や制度の御手の命じるまま書く事ではなく、不可触であるはずの法や制度への抵触であった。

もちろん、いうまでもなくこれは、中上健次自身もまた「中国人」であるという自覚へとつながっていくわけであるが、その自覚と呪縛への抵抗の意志を欠いたまま、あるいはその事実を素通りして、作家の個性や時代の文芸思潮を云々する「国文学者」を、中上健次は人間中心主義、「文学」主義と批判し、「正直、苛立つ」とまで書くのである。

もとよりこの中上健次の発言は、整然と論理だてられたものではなく、彼のいう「国文学者」のだめさかげんは、彼の秋成観や文学観を語るグシにつかわれただけのものとして、過敏に反応するまでもないものなのかもしれないが、しかしそれでもなお、これは引用や参照といった方法にかかわる秋成論に対して、ひとつの示唆を与えてくれるものであるように思う。

彼は次のようにいう。

秋成の小説がともするとそのように批評的な感触を与えるのは、理由が幾つもある。理由の第一に秋成がその中国人であるという自覚、中国人であるという差異性にさらされている事があり、いまひとつ、これらの物語に典があるせいである。この出典があるという事実を、法・制度に置き換える

と、法・制度(物語)をいまひとつの法・制度(物語)に組み  
変え、ズラす事である。

ここで中上健次のいう批評の語が、なまやさしい、微温的な、  
先行物語に対する同和を意味するものでないことは、この直後に  
「法・制度に自覚的であり醒めた分だけ、法・制度は確実にこの  
中国人を困い込み、しつべ返しをしたと言えり」とあるのをみれ  
ばあきらかであるが、このように書いて彼は、彼の秋成論を次の  
ようにしめくくる。

秋成とは、単なる人間の名ではない。なにもかも抑圧下に繰  
り込み、その抑圧に異和を唱える者や齟齬を起すものを排除  
し、さらに排除した者にも新たな抑圧を加える作用を持つ物  
語への、邪悪な意志そのものだと言った方がよい。(略)現  
代作家の我われは秋成を読むことによつて、秋成の邪悪な意  
志を自分の中に確認する事でしか、迷妄の破壊、通俗の破  
壊、「文学」主義への破壊、人間中心主義の破壊は起り得な  
いのである。

中上健次によれば、物語を書くこととは物語なるものがアプ  
リオリに強要する「法・制度」への服従に対して、「邪悪な意志」  
をもつて対抗することであるという。彼の用いたべつこの言葉を引  
けば、「それ何事かは(それが何だと言うのだ)」という、畏れを知  
らぬふてぶてしい態度で「聖域」を「侵犯」することであるとい  
う。つまり彼が、書くこととは批評することであるというときの  
批評の語は、物語が隠蔽するものを暴きだし、自らもまた暴きだ  
されることを意味するのであり、ゆえに典拠の引用・参照という

方法の意味するところは、先行する作品の利用・借用というよう  
な親和的次元においてではなく、そこにある物語のすがたをとつ  
た「法・制度」に対決し、それを無化するもうひとつの物語をぶ  
つけてゆく闘いという次元での、危うい身のさらしかたなのであ  
る。

「蛇性の淫」にもどりたい。

では、中上健次の言説によつてこの作品をながめるとき、彼の  
いう批評の語はどのような相貌をもつてあらわれてくるか。つま  
り秋成は、どのような「法・制度」と向きあっているのである  
か。

ちいさな疑問がある。中上健次は本作の典拠に「白娘子水鎮雷  
峰塔」があることを知っていたであろうか。さきに引用した文章  
には「出典」の語がみえるが、これが「白娘子」をさしたもの  
か、そうではなくていわゆる道成寺説話をさしたものか、判然と  
しない。しかしながら後における予定の「浮島」という作品に、  
「道成寺伝説」の語はみえるが、白話小説については一言もない  
ことを考えれば、「白娘子」の存在(これが第一典拠であることは、  
昭和二十年代にすでに明らかであった)を知らなかったのではないか  
とも思われる。そしてそうであるなら、彼が揚言する「法・制  
度」とは、一義的には「法華験記」や「今昔物語集」に記録され  
た道成寺説話であるということになる。

もちろん「法・制度」にかかわる彼の言説は、それが日本成立  
のものであれ、中国成立のものであれ、「中国の法・制度」であ

るわけで、どちらにせよとりあえず支障はない。中上健次の理解によれば、秋成はそれら書記されることによつて抑圧・懐柔の意図をむきだしにした言語という「法・制度」に異議を申し立てた存在である。だから論理的には、中上健次の「白娘子」についての知識の有無とは無関係に、この「出典」なる語は道成寺説話をさしているものとうけとつてよいはずである。なぜなら、いうまでもなく道成寺説話は、われわれの「法・制度」(言語)としてもっとも親和力をもつ物語だからである。中上健次の理解するところ、秋成が「蛇性の淫」によつて対峙した物語とは、やはり第一義的には、このわれわれの無意識にもっともふかく入りこんだ物語ではなかつたかと考えるのである。それは中上健次のことばを引けば、「その抑圧下におさまり馴れてしまえば、たとえようのないほど快い」ものであるが、そうであるがゆえに中上健次をもっとも苛立たせているものでもあり、彼が不快感をかくさない人間中心主義、「文学」主義の温床でもある。

「蛇性の淫」と道成寺説話。あまりにも明白であるがゆえに、このテーマはむしろわたしの盲点であつたのかもしれない。一笑に付されるかもしれないが、中上健次の秋成論によつて、わたしはこの単純なことに気づいたのだといつてもよい。だからすくなくともわたしには、「正直、苛立つ」という彼のことばが、わたしに対するものとしてなら正当なものであるように思えるのである。

秋成は物語という法・制度を批評した。それがすなわち「蛇性の淫」を書くことであつたと中上健次はいう。そして高田氏の指

摘にもあるように、彼もまた「蛇性の淫」を批評し、それをすなわち彼の小説執筆の根拠とした。書くこととは「法・制度」に「抵触」することである、という自覚を介して彼が秋成に連帯しようとしていることを考えるなら、やはり彼のいう「出典」とは、自明のことであるがゆえにみなが素通りしてしまふような巨大な物語、道成寺説話でなければならぬように思える。中上健次が苛立ちながら指摘したのは、眼前にある巨大な物語への無自覚な馴順、いいかえればわれわれを無自覚にさそひこむ物語という「法・制度」の巨大さではなかつたかとわたしは考える。彼の理解では、秋成こそは道成寺説話という日本の物語がじつは「中国語」で書かれ、読まれてきた物語であることに気づいており、それに「邪悪な意志」をもつて「抵触」することによつて、自らのあらたな物語の根拠を得た数少ない作家なのである。「国文学者」がじゅうぶんにみてこなかつた秋成が、中上健次にはみえていたのではないか。

わたしも彼にならつて「蛇性の淫」を道成寺説話への果敢な異化の企てとして読んでみようと思う。そしてそのとき秋成が依拠したものが白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」だと考えてみる。つまり、「蛇性の淫」を道成寺説話に対する壮大な批評の物語として読むのである。批評の切っ先は「白娘子」ではなく、より身近なより安定した物語にむけられている。このとき、「蛇性の淫」と白話小説の関係は、道成寺説話というほんとうは「中国語」で書かれた物語に隠蔽されているものを暴きたてるために、「中国人」秋成がもちいた戦術的「中国語」というところまで後退す

る。

道成寺説話を大蛇と道成寺の鐘にまつわる書承説話群と定義するとして、そこには物語の展開におおむね共通のパターンが存在する。それは、女のもとへの男の来訪→恋愛の契約→男の裏切り→男の逃走と女の追走→鐘の中での男の焼失という要素からなり、さいごに蛇体に変化した男女の法華経による救済が書かれるというものである。とくにさいごの救済は、道成寺説話を定位する重要なモチーフであって、蛇体の女の執念深さも男の身勝手さもこれによって稀釈されるし、女の純情や男の不幸について、おそらくは読者がいさぐさ同情心に、ひとつの安心が与えられることになる。読者の道成寺説話への興味が、異類と人間の恋愛という伝奇性にあることはたしかであろうが、構造的にはそれが法華経による救済・浄化という予定調和的な結末によって支えられ、読者にある種のカタルシスを提供するものであったこともみのがせない事実である。

では秋成は、その定型化した説話（法・制度）をどのように批評したか。中上健次のことばを用いるなら、秋成は道成寺説話のなにをどのように「ズラす」ことで、彼自身の物語をうみだしたのであるか。

秋成の照準は明確にさいごの救済にむけられている。

さきに言及した「蛇性の淫」結末近く、豊雄が富子にのりうつった真女子にむかって「此富子が命ひとつたすけよかし。然我をいづくにも連ゆけ」と自己犠牲をもいとわぬ態度を示す場面

は、その点に関する秋成の意志を如実に示す箇所であろう。この箇所こそは秋成の、物語に対する意志を確定する最終の決定的な分岐点であった。矢野公和氏の指摘にもあるように、このとき豊雄が自らのことばどおり真女子と行動をもにしていたなら、豊雄は道成寺説話の男と同様に蛇体となり「繫々穢キ」（『今昔物語集』）境涯に墮ちることとなるであろうが、それゆえにこそそこに宗教による救済・浄化というモチーフが書きこまれるみちがひられることになる。しかし、秋成はそうは書かなかった。そのみちを選ばなかった。すでにみたように、豊雄は直後に翻意し、真女子を調伏してしまう。いや、この場合、よりていねいになら、真女子か富子か、女はどちらかを選べとせまるが、真女子が富子とひとつになっているかぎり、豊雄には選びようも棄てようもなかったのだといつてもよい。

ともあれ、いずれにしても秋成は救済を、というよりは救済という「法・制度」を拒否したのである。もちろん、鉄鉢に白蛇がおしこめられてしまうという結末自体は、「白娘子」のその踏襲である。しかし、これもすでに指摘されているように、典拠における蛇退治はまず道教の道士が試みて失敗し、次に蛇取り、そしてさいごに金山寺の法海禪師がそれを成し遂げるのであり、たしかにここに仏教の優位性の揚言を読むこともできるが、これに対して「蛇性の淫」においては仏教対道教というような構図はあつさりとして切り棄てられてしまい、白蛇の敗北だけが書かれているといつてよい。

「白娘子」本文には結末ちかくに「許官請願出家」とある。そ

して主人公は法海禪師に師事し、座禅したままで往生を遂げたと書かれるのである。これを「蛇性の淫」とくらべてみれば、秋成の用意した結末のきびしさはきわだつているといえよう。「豊雄は命恙なしとなんかたりつたへける」。真女子は地中に封印され、富子も死んだ。豊雄だけが独り生きながらえ、とりのこされるという結末。「白娘子」がたんに仏教の道教に対する勝利をえがいたばかりでなく、主人公の出家というかたちで仏教の人間に對する勝利をもえがいているのだと解するならば、秋成のつくりだした豊雄は、個としてまるごしのまま、なんの救済もほどこされないで抛りだされているといえるだろう。そもそも富子をあらたに設定し、護るべきものと闘うべきものを合体させて、その喪失を豊雄に負わせたこと自体が典拠からのおおきな逸脱である。もちろんそれを秋成の「白娘子」に對する「批評」とすることも可能である。が、すでに述べたように、ここでわたしはひとまず読本研究家の立場をとらない。秋成は「白娘子」の必要な箇所を必要に応じて用いたにすぎないと考えてみる。

「蛇性の淫」に創作された富子は、「芝の庄司」の娘であつたという。この設定は「道成寺縁起」に女を「紀伊の国室の郡、真砂と云所に宿あり、此亭主、清沢庄司と申人の姫にて」と記す（謡曲「道成寺」にも「真砂の庄司」とある）ことにもつづいたものであるが、だとすれば秋成は道成寺説話の女をふたつに分解し、真女子と富子をつくりだし、ふたたびそれを合体させて（真女子がのりうつつた富子）、調伏したことになる。やはり秋成の撃つたものは道成寺説話ではなかつたか。比喩をもつていえば、

道成寺の鐘の転倒されたかたちが、真女子を閉じこめた鉄鉢なのである。

仏教の勝利を拒絶したことはもとより、法力による救済をも拒絶し、つまりわれわれの無意識にふかく根づいている物語の予定調和を拒絶して、秋成は豊雄という一個の人間の勝利の物語をつくりだした。しかしそれがどこか喪失のニュアンスをふくむものであつたことは前述のとおりである。ここで喪われたものとは富子であり、ひいてはながい空白の余生を生きることを余儀なくさせられた豊雄の感情でもあつたが、中上健次の言い方をまねてさらにつけくわえるなら、それは救済の物語という「法・制度」自身でもあつたともいい得よう。

そして、中上健次の仕事は、うえにみた秋成の物語に對する「邪悪な意志」のさきにあるとわたしは考えている。

「蛇淫」という作品がある。「岬」と同年に書かれたこの物語は、四方田氏が「女たちの物語」と呼んだ一連の物語群の起点に位置するが、同氏がまた「路地」の語の初出と指摘するように、秋幸を中心とする「男たちの物語」と発生の起源（時と場所）を一にするという点でも重要視されるべき作品である。そしてこの「蛇淫」は、四方田氏が指摘し、高田氏が論及するように、「蛇性の淫」を典拠としている。典拠ということばは、この場合ふさわしくないかもしれないが、「現代作家の我われは秋成を読むことによつて、秋成の邪悪な意志を自分の中に確認する事ではか」云々という既掲のことばを思いおこすなら、中上健次が標準を定

めた目標というほどの意味で典拠といってもよいかと思う。

「蛇淫」のあらすじについても、くわしくは触れ得ない。順とて青年が、かつて彼の家族が暮らしていた路地からやってきたケイという名の女と同棲し、それに反対する両親を殺害する物語とだけ述べておこう。前年に千葉で起こった事件をモデルとしたこの短篇は、しかしそれがいままお路地に住んでいる女と路地から這い出た男との物語に書き換えられることによって、確実に「蛇性の淫」にくさびをうちこむものとなっている。

「蛇淫」と同年に、中上健次には「浮島」という作品もある。舞台は新宮の浮島。木馬引きの男が浮島の遊郭の女を絞殺する物語であるが、四方田氏もいうように「蛇性の淫」を「批評的な眼差しのもとに読み返した」作品であって、「蛇淫」と一対をなすものとみなしてよい。

そのなかで中上健次は「大蛇に魅入られたおいのが、浮島の森の沼の底にひきずり込まれる伝説があるが、それに材を取った秋成の「雨月物語」蛇性の淫にあらわれたのは、蛇が女である」と書く。女郎はこの浮島の沼の女、伝説のおいの分身でもある。男は言う。「死んでやると」。女が応える。「うれしいなあ。嘘でも、そう言うてくれたら」。男のことは結果として嘘であった。男は女を殺して、女の中からだにしがみついて、泣く。「おれを救けてくれ。……これから先どう生きればよいのか。ふぐりを持ったこの男のおれは、どう生きればよいのか」。

豊雄と男は重なりあう。中上健次は「よしんば女が、蛇の化身で、淫乱で、さかしらで、邪悪であっても、女とともに果の果ま

で行つてこそ、わざわざこの世にふぐりを股の間にぶら下げて出て来た、男というものである。道成寺の安珍も、蛇性の淫の豊雄もふがいない。逃げ出すことは要らない」と書くが、結局男はここでも、「果の果まで」女郎と行くのではない。男は泣くだけである。豊雄と同じく、男は宙吊りのままとりのこされたといつてよい。

中上健次は豊雄を批判し、しかし豊雄を受け容れる。ここには秋成に対する「邪悪な意志」は感じられない。これはいわば秋成を、「蛇性の淫」を、受肉する作業・過程の痕跡であつて、むしろ彼の批評は「蛇淫」において結実しているとわたしは思う。

そのことをいうために、もういちど「物語の系譜」にもどつてみたい。

この真女子の邸があつた浮島がこの秋成の時代から後に被差別部落民と非被差別部落民の混住地域であり、遊郭が置かれた事を考えるなら、真女子という異類の本性を持つ女が露呈した性そのものの化身のように思う。

高田氏もいわれるように、「蛇性の淫」には浮島を真女子の居住地とする記述はどこにもない。高田氏は「中上が「蛇性の淫」の本文にも浮島の名があるとかんちがいたからではないか」と考えられているが、中上健次に「雨月物語」を耽読する時期があつたことを思えば、むしろこの錯誤にこそ彼が物語を書くことの意味を、つまり中上健次の「邪悪な意志」をみてもよいのかもしれない。

浮島の森の伝説については、くわしくは知らない。父親ととも



に芝採りにでかけた娘が、森ふかく迷いこん沼の大蛇にひきずりこまれたというものであるが、その起源をつきとめることはむずかしいだろうと思う。そしてむしろこの場合、それが書承されない、ゆえに起源不明の伝説の地であることが重要なのではないかと思う。秋成の時代、浮島は神倉山の行者の聖地であった。中上健次の時代、そこには遊郭があった。しかし、浮島が聖地・聖域であることにかわりはないであろう。非日常の空間、それが浮島であって、おそらくは女人禁制の地であったそこに遊郭がつくられたという転倒自体が、伝説の沼の聖主(大蛇)が男から女にすりかわつてゆく過程をシンボリックにあらわしているもののように思うのである。

つまり、真女子の出自が浮島にあったということが、中上健次にとってはだじであつたのではないか。彼が「蛇性の淫」をそう批評的に読んだということなのではないか。書記されない大蛇伝説への入口がそこにあり、聖なる真女子を遊郭の女郎として「浮島」で受肉することによって、中上健次は「蛇淫」のケイをうみだしたのではないか。

ケイは右耳が聞こえない。これがいわば聖痕である。「蛇女房譚」には池から片目の女があらわれるというモチーフがあるが、その転化したものと考えてもよい。ケイは聴力を失つた原因を、順の家のいちじくを盗んで母親にぶたれたからだと言う。確かめるすべもないことであるが、ここで中上健次にエデンの園での蛇といちじくの連想がはたらいたとも考えられよう。禁断の果実を食べたあたりが目を見開いて、裸をいちじくの葉で隠すというあ

の神話を。ふたりは楽園を追放される、そして、その子(ケインとアベル)が殺人を犯すという、人間存在にかかわる文字どおり(創世記)もつとも根源的な神話を。

つまりわたしがいいたいのは、ケイは浮島の沼を通つてはるか遠い神話の世界からあらわれたのだ、ということである。中上健次は「浮島」をはじめとして、蛇と女の伝説について、南方熊楠(のおそらくは「十二支考」の名などをあげながら、その起源にまでさかのほろうとする言説をくりかえしているが、ケイはそんな彼の志向性のあらわれとして、沼の底の底からくみあげられた存在であるのかもしれない。

そのケイを順の母親は「あの女は淫乱なんよ、蛇なんよ」と忌み嫌う。父も、右耳失聴の原因は、ケイの母の愛人に犯され、母親に殴られたからだということを順に伝える。四方田氏はこれを「封印されてきた畏るべき真実の物語」と書き、それが「さらなる畏ろしい物語を紡ぎ出」すことになると思われ、むしろここに真実の物語というべきものとすれば、それは「材木かつぎ」から成り上がり、路地を脱出していまや土地の名士たらんとする両親の血と暴力の過去なのではないかとわたしは思う。ケイというひとりの女が登場し、順の家族の隠蔽されている物語を暴きはじめた。物語があらたに紡がれたというよりも、不自由ない生活の皮膜の下にある血と暴力の物語が、ケイという女の存在によつて呼びさまされてきたかようである。冒頭に書かれる、洗つても洗つてもまとわりつく「あぶく」のように、路地を抜けだたものをどこまでも追いかけてくる路地をケイは体現し、順の

家族にとりついたのでいい。真女子が富子にのりうつ  
ことで秋成が救済という物語を「侵犯」したように、中上健次  
はケイを伝承の深部から呼びおこすことによって、路地の物語を  
隠蔽するものに路地をつきつけた。つまりケイは、一個の「邪悪  
な意志」である。

豊雄が富子を殺してしまったように、順は両親を殺害する。た  
だ、「蛇性の淫」と「蛇淫」のちがいは、そのさき、順がケイを  
ともなつて天王寺へとむかうところである。「浮島」で中上健次  
は「蛇性の淫の豊雄もふがいない。逃げ出すことは要らない」と  
書いたが、たしかに順はケイから逃げることなく、ケイといっ  
しょに逃げだすのだ。これこそが、「蛇淫」の「蛇性の淫」に対  
する批評であつた。

天王寺。「紀州、木の国・根の国物語」によれば、彼はそこを  
「都会であり、近代である」と書きながら、紀州を経巡るこの旅  
のさいごの地として、「私は、また天王寺をよろぼう。記紀に収  
まりきらない神人らは、彼方のここにいま、居る」とも書いてい  
る。

秋成の仕事が書記された道成寺説話の「法・制度」を露呈さ  
せ、解体することであつたとすれば、中上健次のそれは、その秋

成を転回点として、個としてむきだしのまま立ちつくす男に、書  
承説話以前の根源的な物語をさぐりあて、回復せしめるものでは  
なかつたかと思う。豊雄が生きるはずの物語なき余生に、中上健  
次は物語をあたえ、順はケイと天王寺でその物語を生きてゆくこ  
ととなる。

注(1) このほかに「西湖佳話」中の「雷峯怪蹟」の名があがっている  
が、ここでは触れない。

(2) 鷗月洋氏著、中村博保氏補筆「雨月物語評釈」(角川書店)等々。

(3) 森山重雄氏著「封建庶民文学の研究」(三一書房)の第三部等。

(4) 「貴種と転生・中上健次」(新潮社)。以下、ひとつひとつに注記  
することはしないが、すべて同書からの引用である。

(5) 「女と蛇 表徴の江戸文学誌」(筑摩書房)。注(4)と同様に、  
煩瑣な注記を省略する。

(6) 以下、中上健次作品の本文引用はすべて「中上健次全集」(集英  
社)による。

(7) 「雨月物語私論」所収論文「女なんてものに」——「蛇性の  
淫」私論——。

(8) 田中優子氏著「江戸の想像力」(筑摩書房)第三章等。

(9) 「紀伊国名所図会」等。